

- I. 原稿募集
- II. 村瀬智之「大学以前の哲学教育」
- III. 島村修平「ピッツバーグ大学滞在記」
- IV. 長田 怜「分析哲学と文化をつなぐ雑誌『フィルカル』の刊行とその背景」
- V. 石本基金「国外学会参加費用補助」成果報告
- VI. 編集後記

I 原稿募集

科学哲学会ニュースレターは2010年からオンラインのみで発行される情報共有のためのニュースレターとして再出発しました。さまざまな研究会の活動、海外の学会の参加報告、ご自分が研究されている分野の最近の研究動向など、情報交換の場として活用していただくと幸いです。ニュースレターに投稿を希望される方は、科学哲学会事務局までご一報ください。

II 大学以前の哲学教育

東京工業高等専門学校准教授
村瀬 智之

<はじめに>

今回、このような文章を書かせてもらえる理由の一つは、私が大学以前の段階の哲学教育に多くかかわってきた経験があつてのことだろう。都内の公立中学校の「哲学」の非常勤講師を皮切りに、高校の「公民科・倫理」、また、現在の勤務校である高等専門学校（高専）での授業等、いわゆる大学以前の哲学教育にかかれこれ10年ほど携わり、実践研究を中心に哲学教育の研究も行ってきた。

といっても、研究の当初から哲学教育研究を志していたわけではない。ある意味で私はごく普通の大学院生であった。現代の英米圏の議論を元に認識論や存在論についての研究をする一方、呑みながら自分の将来を心配する。そんな学生であった。『科学哲学』に投稿した論文もノウハウ(knowing-how)についてのものであり、博士論文もその延長線上のテーマを扱ったものである。ところが、都内の公立中学校で数学の非常勤講師のアルバイトをしたことをきっかけに、成り行きから「哲学」の非常勤講師になり、先行実践や先行研究の少なさから、仲間たちと海外の実践を調べはじめた。大学ではなく高専に職を得たこともあって、その流れは加速し、いつの間にか「哲学教育の人」になってしまった（この辺りの事情については、以下で少し触れている。「哲学教育を何ものとして行なうのか？」（『Philosophy for Everyone 2013-2015 (UTCPブックレット)』、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 共生のための国際哲学研究センター (UTCP) 上廣共生哲学研究部門、39-42頁）。http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/publications/2016/03/philosophy_for_everyone_201320/）。

<大学以前の哲学教育を分類する>

大学以前の哲学教育といっても、大学の授業と同様、学校ごと科目ごとに違いがある。たとえば、高校の「公民科・倫理」は学習指導要領に規定され、検定教科書はどれも似ている。それに対して、現在の本務校である高専は、高等教育機関で学習指導要領による規定はなく、基本的には各校で独自にカリキュラムを編成している。高専はともかく、大学以前の教育においては、一般に大学と比

べて様々な「縛り」が存在し、それが授業に対して大きな影響を与えている。

また、授業内容は専門家養成との関連によって変わってくる。文学部哲学科を志望する生徒のいる高校の授業と、大学に進学する生徒はほとんどいない高校の授業では、同じ枠組みだとしても自ずとその内容は変わってくるだろう。そもそも人文社会科学系科目の少ない高専においては、さらに高校とは違う授業が構想されることになる。

このように「大学以前の哲学教育」は、あまりに多様なものである。そこで、今回は私が実際に行っている授業のやり方を紹介することを通して、大学以前の哲学教育がどのようなものか、何に注意していて、それはどのような意味をもつのかといったことを紹介したい。

<実際に私がやっていること>

はじめに、現在の本務校である東京高専（東京工業高等専門学校）について簡単に紹介しておく。東京高専は、東京都の西側、高尾山の近くにある工学を専門にする工業高専だ。5年制の本科、それに加えて2年制の専攻科（修了すると学士号をもらえる）が置かれており、多くの学生は中学校を卒業後15歳で入学、2年生で各専門学科（機械工学科、電気工学科等の5つの学科）に配属される。

東京高専には、将来哲学や倫理学を専門とするであろう学生はおらず、また、半数の学生が本科卒業後に就職をするため、完成教育の側面を持つ。別の言い方をすれば、東京高専での哲学教育は、非専門家の哲学教育が目指され、学生一人ひとりから見れば人生で唯一の哲学の授業になる可能性が高いものなのである。

1年生の授業では、米国で生まれた哲学教育プログラム「子どものための哲学（子どもの哲学：Philosophy for Children）」の手法を基にしながら、学生同士の議論（哲学対話）を促す授業を行っている。議論のテーマは様々だ。自由に問いを決めてもらう場合もあれば、テーマを提示した上で問いを考えてもらう場合、あるいは、哲学の古典の一部を読み、そこから問いを考えてもらう場合等がある。（外国における哲学教育については、以前のニューズレターに山田圭一さんが詳しく書いてくれている（「学校教育と哲学のあいだ」、No.51、2015年5月））。

しかし…と、中学校や高校の現状に詳しい方は思うかもしれない。学生に議論をしてもらおうとしても、大学生でさえなかなか質問や発言は出ないし、まともな議論にならないのではないかと。これは的を射た疑問である。中等教育では、一クラス30-40名のところが多く、東京高専の場合も一クラスは40名を超える。このような中で、外国で行われているように机やイスを円形にして、対話型の授業を行うことは難しい。といっても、これは「いきなり」行うのが難しいだけであり、1年間の授業を通し少しずつ慣れていく中で、学生の発言は少しずつ変化していく。

では、どのように「慣らして」いくのか。まずは、意見を口頭で言うのではなく、紙に書いてもらう形にする。ただ、リアクション・ペーパーのように「学生から教員に向けて」ないし「教員から学生に向けて」ではなく、「学生自身の問いに学生同士」で議論をする。

「サイレント・ダイアログ」と名付けられた、この方法では、一枚の紙を回すことで、一つの問いに次々と別の人の意見が書かれることになる。議論がしぼんでしまわないように二人目を書く人には、一人目に対する反論（あるいは、一人目と違う意見）を書くように促す、といった制限を課す。（詳しくは、『中学生からの哲学する対話教室』（シャロン・ケイ、ポール・トムソン著 河野哲也監訳）内の「日本語版解説 先生のための手引き」（149-159頁、2012年）、および、拙論「紙上対話という授業実践の試みー哲学的議論による思考力の育成を目指してー」（『高専教育論文集』、38号、368-373頁、2015年）を参照のこと）。

あえてこのような回りくどい方法をとる理由は二つある。一つは、口頭で話すよりも紙に書くことに学生たちが慣れているためだ。小学校から中学校にかけて学生たちは口頭で何かを表現することよりも文章にして何かを表現する機会が多い。（学校やクラスの評価として「静かであること」や「落ちついていること」が重視されていたことを思い出して頂きたい。）そのため、教室の中で発言することは学生にとって大きな負荷となる一方、紙に書いて表現することへの抵抗は少ない。後でも触

れるが、学生たちの知識の程度だけではなく、身に付いてしまっている態度や考え方を知り、少し意識しておくことは授業を行う上では重要だ。

もう一つのより重要な理由は、学生自身に、様々な意見を聞くことで学ぶことがある、ということを実感してもらうためだ。最近では少しずつ変わっているものの、多くの学生にとって小学校から中学校のあいだに答えが簡単に分からないような問題について学生同士で議論した経験は、ほとんど、ない。学校での議論のほとんどは、すでに答

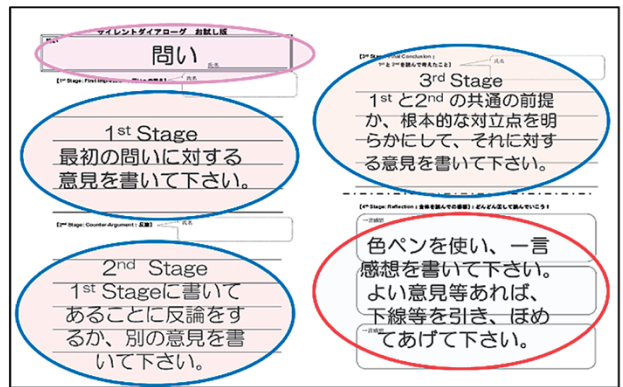
えが決まっているものについて、そうとは知らないふりをしながらするものなのだ。それに対して、哲学や倫理学で扱われる問いは、答えが容易には分からない。それどころか、教員も答えを知らない。サイレント・ダイアログでは、このことを学生が知り自分たちが議論をしながら考えていくことが無駄なことではない、と実感することができる。

このような、ある意味では慎重すぎるステップを踏みながら、少しずつ哲学の議論とはどのようなものか、を体験してもらおう。といっても、学生たちは当初から「哲学的」と言えるような疑問や問いをもっていることが多い。具体的に学生が出した問いを見てみよう（以下で挙げる問いは、今年度の最初の授業で、ある1クラスで挙げられた問いである）。「僕はどうして僕になったのか」、「色は同じように見えているのか」、「なぜ偽善はダメなのか」といった哲学や倫理学で問われがちな問いもあれば、「なぜ人は全員、同じ思考を持っていないのか【説明：人と考えが違ったときに、なんでそう思うかが気になったから】」といった、本当に問いたいことがどのようなことなのかをもっと明確に書いてほしいと思うような問いもある。ただ、彼らが出す問いの多くはとても興味深いもので、何かしら応答したくってしまうようなものばかりである（これは個人的な性癖の問題かもしれないが…）。少なくとも、哲学の研究者であれば、これらの問いに他の学生たちよりも上手く応答できるであろうし、上手く議論することはできるだろう。これを読んでくれている皆さんなら、問いを読んだ瞬間に色々な応えの型が思い浮かび、議論をしたくなるのではないだろうか。学生自身も同じように感じてくれれば、その後の授業において口頭で議論をする際の動機づけになる。

もちろん、教員による上手い応答を求めている学生もいる。しかし、ほとんどの学生、特に哲学に関心のない学生にとっては、教員の上手い応答よりも自分たちの仲間から応答をもらいたいと思っている。サイレント・ダイアログでは、最初の問いに対して同じクラスの複数の学生が応答したプリントは、元の問いを出した学生に返却される。最初の問いに対してどのようなことが書かれているかを自分で読むことになるのだ。この時には、どんなにうるさいクラスでもほぼ必ず静寂が訪れる。どのような反応・応答があったかを、学生たちはとても真剣に読む。それは、教員が書いたコメントとは比べ物にならないほどの真剣さである。学生同士の議論を重視している理由の一つは、教員对学生よりも学生同士で議論した方が、学生が真剣に聴き考える（と私が感じる）からである。

もちろん、これだけで子どもたちは話しをしてくれるわけではない。山田圭一さんが紹介しているハワイでの「子どものための哲学」(p4c Hawaii) で使われているコミュニティ・ボールといったアイテムも使っている。

コミュニティ・ボールは、大人数で丸くなって議論をする際に誰に発言権があるかを示すものだ。活用の仕方は様々だが、私の授業では、前期の早い時期にクラス毎に作り、議論をする際にはもっていく。(コミュニティ・ボールの作り方等については以下のホームページに詳しい。p4c-japan (<http://>



サイレント・ダイアログのプリント一例

p4c-japan.com/about_tool_ball/))

サイレント・ダイアログであれコミュニティ・ボールであれ、このような小技を使う理由は、学生同士に議論をすることの良さや楽しさ、そのやり方について学んでほしいからである。その意味では、私が行っている授業では、自分の意見を表明することや、単なる討論ではなく他者と建設的に議論することといった、学問の基礎にあたる能力の育成が目指されているといっても良いかもしれない。

ここには一つ哲学的（ないし教育学的）な問いがあるだろう。「哲学的に思考すること」と、上記で言及した「自分の意見を表明すること」や「他者と議論すること」といった、学問の基礎力はどのように関係しているのか。

この問いに、ここで答えることは（もちろん）できない。しかし、重要なことは、意見表明や他者との議論といったあらゆる学問の基礎になるような能力の育成にとって哲学的な問いを議論することは役に立つし、哲学的な問いを議論し考えるために先の能力は不可欠であろうということだ。前者については、教員さえも答えを知らないという哲学的な問いと論証の構造が議論を促すという点が重要である。後者については、ある種の孤高の天才を除く多くの人にとって真であると思われる。それゆえに、哲学的な問いを議論し考えることを（大学であれどこであれ）目指すのであれば、意見表明や他者との議論を促進するような授業づくりや状況づくりが必要なのだ。



今年度使われていたコミュニティ・ボール

<なぜ「小技」を使うのか、その背景にあるもの>

先に紹介したコミュニティ・ボールといった「小技」は、哲学的な議論や思考にとってひどく非本質的なものに見えるかもしれない。しかし、このようなアイテムは、今日は議論をしますよ、質問に「正解」で答えなくて良いんですよ、という強いメッセージになる。いわば、議論をすることの象徴である。大学の、特に少人数のゼミ形式の授業であれば、このような象徴はいらないかもしれない。私の出身大学にあった「演習室」は、その場所自体が議論をすることの象徴であったようにも思われる。しかし、あえて強調したいのは、大学にいる学生たちは、ほんの数年前までは学校や教室とは教師からの質問に「正解」で答えるというコミュニケーションしか許されない場である、と認識していたということだ。教育学の中でよく言及される、教室での会話モデルがある。

会話 1

A 「今何時でしょうか？」

B 「10 時 30 分です。」

A 「正解です。」

会話 2

A 「今何時でしょうか？」

B 「10 時 30 分です。」

A 「ありがとうございます。時計がなくて困っていたんです。」

どちらが教室で、どちらが日常会話は、一目瞭然である。学校や教室という空間で話すことができないことは多い。

ある科学的な事実を学ぶための実験をしていたが、複数のグループで実験結果が異なり、実験結

果C1を出したグループが多かった、としよう。この時、C1は、その時間に学ぶべき事柄C2とは異なった結果であった、と考えよう。だとしても、教室では、C1が検証されたりC2と対比され再び実験が行なわれたりすることはほとんどないし、教員が「C2が正しい」と宣言したとしても、それに疑問を呈する生徒はほとんどいない。そんなことをすれば、「空気が読めない」「メンドウな」やつだと思われるに決まっている。これは、科学的真理の探求の仕方の話でもないし、授業のあり方の良い悪いの話でもない。学校に行ったことのある人たちが共通に学ぶであろう、暗黙の了解についての話である。

大学で教える哲学研究者と話をすると、学生が議論してくれない、発言してくれないといった嘆きをしばしば聞く。その背景にはこの暗黙の了解があるのではないだろうか。この暗黙の了解が大学に進学をただで自動的になくなるのかといえば、そうではない。もしかすると、過去においては、大学という解放的な場によってそれまでに身に着けてしまった学校的な規制を知らず知らずに外すことができたのかもしれない。入学式から授業を選択するという新しい経験を経て、生徒が自然と学生に変わったのかもしれない。しかし、「高校化」と揶揄されるような手厚いサポートの中で大学生生活をスタートする現在の学生たちがそのような態度に自然と移り変わるということはないのではないか。だとすれば、受け入れる側の大学教員も先のような暗黙の了解に学生たちが縛られていることを意識する必要がある。そして、授業において自由に考え哲学的に議論してほしいと言うのであれば、それを明示的に伝え、何をしてほしいのか、これまでの学校や授業とどう違うのか、そもそも議論するとはいかなることであるのか、を丁寧に説明し実演する必要がある。小学校から高等学校まで、よくあるパターンでいけば12年間ある。この12年間に徹底的に内面化され、空気のようにになっているものを剥ぎ取るのだ。繰り返し伝える努力を怠ってはいけぬ。場合によっては、先に挙げたようないくつかの「小技」を学ぶことで、その暗黙の了解を崩せるかもしれない。

<哲学的議論は役に立つかもしれない>

このような話は学校だけに当てはまるものではない。そんな反応をもらうことがある。会社に入ったって同じだ、と。会社の会議は、最終的には結論を出さなくてはいけないし、少なくとも何らかの決定や合意を必要とする。その点では哲学的な議論とはまったく違う。しかし、「よい決定」や「よい合意」に至るためには、自由にものを言い、考える時間は不可欠ではないだろうか。上司の意図を読み取ってその場の「正解」を出してやり過ごす。ある意味では、「学校的」で「上手い生き方」かもしれないが、それによって失われるものも多い。

哲学の議論や哲学的思考は、何かの役に立つ必要はない。しかし、一方で、あらゆる学問の基礎力であり、もしかすると企業においても必要とされる（らしい）議論する力や考える力を鍛え、育成することが、哲学の議論や哲学的思考にはできるのかもしれない。哲学研究者が考えているよりも哲学は実は「役に立ってしまう」学問なのかもしれない。最近はそのような印象をもっている。

Ⅲ ピッツバーグ大学滞在記

日本大学理工学部
島村修平

ピッツバーグは、米国ペンシルベニア州の南西部に位置し、日本で言うと名古屋や仙台をもう少し大人しくしたような感じの地方都市である。一昔前には鉄鋼の町として栄えたそうで、『スタンド・バイ・ミー』に出てきそうな趣のある

線路があちこちを走っていたりと、所々にその面影を残している。とはいえ、現在のピッツバーグは大学街という印象が強い。大学周辺や多くの学生が下宿する大学近郊のエリアは、お店やレストランが多く、わりと賑わっている。しか

し、そこから少し離れると、公園と称される山林¹⁾が点在していたり、太い川が流れていたり、いかにもアメリカというスケールの自然が広がっている。そうした土地柄からか、住んでいる人もわりとのんびりしていて親切な人が多い気がする。聞くところでは、治安のよさランキングで全米トップ3に入ったこともあるらしい。

私は、2012年1月から2013年7月までと、2014年4月から2016年3月までの二回に渡って、延べ3年半ほどピッツバーグ大学に滞在した。ある程度まとまった期間英語圏で生活したのは私にとってはこれが初めてで、滞在の始めから終わりまで、英語では苦勞しっぱなしだった。また、滞在時の私の身分は、訪問研究員というお客さんのものであった。こうした事情から、ピッツバーグ大学の様子に関して私が見聞きした（あるいは、理解できた）範囲というのは、かなり限られている。そんな私がこのような記事を書くのは少し荷が重い気がする。ただ、もしかしたらピッツバーグの哲学（者）に興味がある人や、英語が苦手なのに海外に行っても大丈夫かと心配している人など、この記事が何かの足しになる人もいるかもしれない。そう考えて、記事の執筆を引き受けさせていただいた。

私がピッツバーグ大学にやってきた目的は、哲学科のロバート・ブランダム教授（以下、敬称略。他の人物も同様）を訪問するためだった。ブランダムは、言語哲学における推論主義という立場やネオ・プラグマティズムの推進者として知られ、ジョン・マクダウェルと並んで現在同哲学科の看板教授の一人である。私は日本で仲間と読んで彼の著作を通してそれらの考えに触れ、強く共感し、それらを援用して自分の研究を進めたいと思うようになった。そのためにはそれらを思いついた当人に直に相談してみるのが一番だろうということで、ブランダムの下を訪れたというわけである。以下では、そんな私が体験した範囲で、ピッツバーグ大学哲学科の様子や、訪問研究員という立場での研究生活について報告してみたい。

ピッツバーグ大学には、哲学科の他にも、科学哲学の学科や研究センター、古典学科があり、とくに科学哲学の部局は世界有数のものとされ

ている。しかしここでは、哲学科に話を絞りたい。哲学科の一つの特色は、論理学や言語哲学、科学哲学、形而上学、認識論、行為論、倫理学など、分析哲学の主要分野の研究者のみならず、アリストテレスや、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、分析哲学史など、分析哲学では軽視されがちな古典・歴史分野の研究者が在籍し、両分野の融合が図られているという点にある。

こうした特色は、ときに「ピッツバーグ学派」と呼ばれることもある、セラーズ・マクダウェル・ブランダムという同哲学科を代表する三人の哲学者の研究にも顕著に表れている。例えば、quietismを貫くマクダウェルと壮大な理論構築を好むブランダムでは、共通の主題を扱いつつも、その立場はかなり大きく異なるように思われる。²⁾しかし両者の研究は、カントやヘーゲルの仕事をその出発点としている点では共通している。こうしたスタンスは、元を辿れば、セラーズに行き着くものらしい。ブランダムが講義の中で紹介していたエピソードによると、セラーズは自身の哲学的課題を「分析哲学をヒュームの段階からカントの段階へと推し進めること」と位置付けていたそうである。ブランダム自身は、この路線を踏襲して、自身の課題を「分析哲学をカントの段階からさらにヘーゲルの段階へと推し進めること」だと述べていた。

なんとも壮大な話である。しかしこうしたビジョンも、看板だけの空中戦のような形ではなく、内実のある新しい哲学説と共に提示されると、単に聞き流すわけにもいかないように思えてくる。実際、哲学科の院生の中にも、古典からインスピレーションを得て現代的な問題に新しい角度から取り組むという方向で研究を進めようとしている人が何人かいて、こうしたスタンスは哲学科のアイデンティティの一面を形作っていると言ってよいと思う。古典に疎い私にとって、古典をそのような仕方では生かそうとする姿勢を目の当たりにすることには、新鮮な驚きがあった。

次に、滞在中の研究生活に関する報告へと移りたい。大雑把にまとめれば、滞在中の私の生活は、一学期に大体一つか二つの講義を受講し、研究会や講演会に参加しつつ、残りの時間は自分の研究に充てるというものだった。以下では、その具体的事例をいくつか紹介したい。

まず、受講した講義の中で最も印象に残っているのは、ブランダムによる *Philosophy of Language: Making It Explicit and Between Saying and Doing* という講義である。これは、表題にある二つの著作をブランダム自身が解説しつつ、同時に言語哲学上の様々な主要なトピックへの入門を図るという講義で、元々それらの著作に関心があってピッツバーグにやって来た私にとってはまさに渡りに船と言えるものだった。ブランダムの理論は、従来の枠組みと大きく異なる上に、それ自体かなり複雑である。また、英語も難解だ（一文がドイツ語のように長くて読みづらい）と言われることが多い。しかし講義では、教育的配慮から各々の論点への動機づけが比較的丁寧になされ、また話し言葉による英語の平明さも相まって、それらの負担が随分軽減されているように感じられた。（講義の音源は全回ウェブ上で公開されているので、興味のある方はぜひ当たってみてほしい。）³⁾ 加えてありがたかったのは、毎回受講者に質問や批判を事前提出することが求められ、講義の中でブランダムがそのいくつかに応答するという形がとられたことである。おかげで私もいくつかの疑問をブランダムにぶつけ応答をもらうという貴重な機会を持つことができた。

この他にも、論理学（マンダース、カイエ）や、認知科学の哲学（マーシェリー）、ヘーゲルの『精神現象学』に関するゼミ（マクダウェル）など、興味深い授業はいくつもあったが、詳細に立ち入るのはやめておく。一つ残念だったのは、やはり私自身の英語力不足である。テーマに関する予備知識があまりない場合、正直に言って、授業について行けていないと感じることが多かった。また、ゼミに参加する楽しみの一つは、教員と学生の丁々発止のやり取りを目の当たりにすることだろう。しかし、学生の発言を聞き取ることは、講義の聞き取りに輪を掛けて難しく、滞在の末期まで私にとっての課題であり続けた。

次に、私自身の研究についても簡単に述べたい。滞在中に私が取り組んでいた問いの一つは、意味論的な外在主義と意味のアプリオリな理解とをいかに両立させるかというもので、私の見込みは、推論主義の考え方がそれを可能にするはずだというものだった。さいわい、ブランダ

ムは大変面倒見のよい人で⁴⁾、このアイデアを展開した私の草稿に目を通し、定期的な面談を設けて詳しく検討してくれた。気づかなかった問題をいくつも鋭く指摘されたものの、論文の狙い自体については一定の共感を得ることができ、私としてはひとまずほっとした。

そうしたやり取りの中で一つ印象に残っているのは、私が推論主義のある論点にブランダムとはやや異なる定式化を与えていることについて些細な質問したときのことである。ブランダム解釈として不当ではないかということをしきりに気にしていた私に対して、ブランダムの答えは、推論主義の展開の仕方一つではないのだから、彼のやり方に拘る必要はないというものだった。これを聞いて私は、ブランダムの論述をなぞろうとすることで、その論点を自分なりに引き受けて説得的に提示する手間を知らずしらずに惜しんでいたと気づいた。考えてみれば、推論主義という立場自体、その新しさにもかかわらず、ブランダムの独創ではない。それは、ブランダムがカントやヘーゲル、フレーゲ、セラーズ、ダメットら様々な哲学者の主張を部分的に引き受け、部分的に修正する中で生み出した立場である。⁵⁾ このことがきっかけとなって私は、（規模は大きく違うが）どこかの時点で自分の一歩を踏み出す思い切りを持たなければならないと思うようになった。

最後にもう一つ、ブランダム主催の論理学研究会についても触れておきたい。ブランダムは先述の二冊の著書の中で、推論主義と親和性の高い論理に関する新しい見解として、論理的表出主義 (logical expressivism) という立場を提案している。この見解によれば、論理結合子とは、基礎にある推論実践を明示化する (express/explicate) という役割を果たす語彙のことに他ならない。この見解を体現するような論理体系を具体的に提示することは、ブランダムが現在進めている研究プロジェクトの一つである。論理学に関しては初歩的な知識しかなかったものの、推論主義やそれに関連する話題に強い関心があった私は、この研究会にも参加させてもらうことにした。

会の仕組みを簡単に説明すると、参加者はまず、ブランダムが書いたプロジェクトの概要に関するノートを読んで、一群の問題を共有する。

その上で、何か(技術的)成果が得られたならば、それをノートにまとめ dropbox で事前に共有する。会の当日には、報告者とブランダムが中心になって、得られた成果を検討したり、さらなる課題を探るといった流れである。会の参加者は、入れ替わりはあるが常時3人から5人程で、哲学科の院生が多く、その一人がブランダムのリサーチ・アシスタント(RA)として中心的な役割を担う。RAは給与をもらう代わりに一定時間の研究専念義務があるそうで、実質的にほぼ毎週何かしらのノートをシェアしなければならない。傍目にもなかなか大変そうである。

会に参加していて驚いたのは、メンバーのフットワークの軽さだった。参加者の中にはロジックの専攻者もいたが、ほとんどのメンバーは、私と同様、ロジックに関心はあってもその専門家ではなかった。実際、私が参加するようになってから二代目のRAを担当した院生(現在はカナダの大学の教員)と三代目の現役RAを担っている院生は、共に論理学の専攻者ではない。しかし、彼らはそうした括りにあまり拘りがなく、技術的な問題にも物怖じせずに取り掛かり、必要とあらば先行する成果を調べつつ、様々なアイデアを試みるといった具合であった。

かたや私はと言うと、彼らのそうした活発な研究姿勢にただ圧倒されるばかりだった。滞在した三年半の間、ほぼ毎回会には出席していたが、みんなのやり取りを黙って聞いていたことがほとんどである。ただ、分からないながらも、彼らが手つかずの問題に対して色々な角度から試行錯誤を繰り返す内に、徐々に成果が出て、新しい論理体系が姿を現して行く様を目の当たりにするのは、とても面白かった。また、何とか話についていくために彼らのノートを追いかけることで、(偏ったものではあるが)論理学の基礎をいくらか学ぶこともできた。

じつは、この会には、日本に帰国した現在もスカイプを通じて参加させてもらっている。帰国の直前に、研究対象の論理体系の一つに関してあるマイナーな結果を出すことができ、それ

をきっかけにグループとの縁が続くことになった。ブランダムには、ほぼ壁際の置物状態で会に参加し続けていた私にも、チャレンジするよう鼓舞してくれたことをありがたく思う。

ここまで書き出してみても、紹介したエピソードがみごとにブランダム/推論主義絡みに偏っていることに気づいた。申し訳ない。ピッツバーグ大学には、ここで紹介し切れなかった面白いところが他にもたくさんあるし、そもそも私が見聞きできたのは、研究コミュニティのほんの一側面にすぎない。興味のある方は、ぜひご自身でピッツバーグの町を訪れてみてほしい。冒頭で述べたように、とても住みやすいところである。最後になったが、本滞在期間中は、日本学術振興会の特別研究員制度及び日本哲学会の若手研究助成から支援を受けた。記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 帰宅時に近道で中を通り抜けようとして一度迷子になった。
- 2) 実際に、マクダウェルは、いくつかの論文の中でブランダムの立場をかなり辛辣に批判している。ブランダムも、自身の講義の中で幾度となくそれらの批判に言及していたが、その際「またジョンにこんなに厳しく批判されちゃったよ」という感じでどことなくうれしそうだったのが印象に残っている。
- 3) <http://www.pitt.edu/~brandom/phil-2420/index.html> を参照のこと。
- 4) 哲学科には、毎学期少なくとも二、三人は私と同じ訪問研究員が訪れていたが、彼らの話を聞く限り、ブランダムは求められる限りみんなと定期的な面談を持っていたようである。
- 5) 例えば、ブランダムは、*Making It Explicit* の冒頭(p. xi)で、推論主義の”building blocks”は何ら斬新なものでも独自のものでもないとして述べている。

分析哲学についての雑誌『フィルカル』が創刊1周年を迎えた。私は同誌の編集長を務めている。若手の哲学系研究者を中心に編集・執筆される同誌は、分析哲学を広く文化一般とつなぐ試みで、今のところ1年に2号発刊の予定、この3月には3号目が発刊されたばかりである。同誌の内容は学術誌よりは柔らかめだが、日本科学哲学会の会員の皆様にも興味をもっていただけのものなのではないかと思うので、以下に少し紹介させていただく。

雑誌のテーマは「分析哲学と文化をつなぐ」であり、アカデミックで専門的な分析哲学の世界と、それ以外の広い範囲の文化との架け橋となることを目指している。であるので、日本科学哲学会の学会誌とはだいぶ目指すところは違って、分析哲学というお宝を学会誌と奪い合いたいわけではもちろんない。学会誌とは違って、学界外部を常に意識して、さまざまな文脈における分析哲学の価値を確かめ、広めることにより、外側へ向けて分析哲学の層を分厚くしていくことに貢献したいと考えている。それは第一には、入門記事やコラム、レビューなどを通じて一般層に分析哲学をアピールしたい、ということであり、第二には、文化を扱う分析哲学の専門論文・論考を揃えることで、内容的な面において文化と分析哲学の双方への貢献をしたい、ということである。

このような企画が可能になったことには、分析哲学の研究状況の進展が大きく関わっている。一言で言えば、研究状況の進展により、文化一般と分析哲学がより密接な関係を結ぶようになってきた、ということである。この変化にはいくつかの側面がある。

まず、分析哲学の対象領域の拡大が挙げられる。分析哲学といえば数学や自然科学の基礎理論を目指して出発している学派であるが、昨今ではそれら「お堅い」領域だけでなく、美術、音楽、文学などの伝統的な芸術から、映画、マンガ、アニメ、ゲーム、お笑いなどの大衆文化にいたるまで、さまざまなものが分析の対象と

なっている。日本では本誌を除き、そのような広い範囲の分析の試みはほとんど見られないが、海外では、哲学者たちが特定の映画やマンガ作品を題材にして論考を寄せ合い1冊にまとめる、というシリーズが複数の出版社から出版され続けており、こうしたことにも分析対象の広がりがよく見てとれる。

本誌ではこのような広い領域の文化に対する分析の試みを「文化の分析哲学」と呼んでいる。その試みのうちには、たとえば、笑いを扱う八重樫徹氏（哲学）の論考や、声優を扱う稲岡大志氏、佐藤暁氏（ともに哲学）の論考がある。また、最新号からはアイドルをテーマに特集を組んで、青田麻未氏や小倉健太郎氏（ともに美学）の論考を載せている。さらに、レビューでも、これら論考よりは柔らかい語り口で、一般向け書籍、映画、マンガ、テレビ番組など、あらゆる領域のコンテンツを、哲学的な観点から紹介している。執筆陣はいずれも哲学関連領域の専門家である。

対象領域の拡大は、以上のような狭い意味での「文化」的範囲の拡大だけを意味するのではない。倫理学における議論の進展も伴って、昔だったら「ナンセンス」の領域に押しやられてもおかしくない、日常生活・人生に関わる問題も、分析哲学の価値あるテーマと見なされるようになってきている。このようなテーマの展開は、たとえば、Wiley社から出版されているPhilosophy for Everyoneのシリーズなどに見ることができる。本誌では、長門裕介氏（倫理学）の連載コラム「生活が先、人生が後」でこうしたテーマを扱っている。長門氏の見つけた身近な例を切り口に、不倫やスノップなど、日常生活に現れるさまざまな事柄の哲学的に興味深い側面を考察しつつ、学術的な文献案内も兼ねるといふ、意欲的な記事である。

ところで、文化的対象領域の拡大を理論的に支えているのは、分析美学というジャンルの成立と成熟である。これに関しては昨今、このジャンルの入門書や古典が続々と翻訳されているこ

とからもよくわかるどころだろう。本誌にもこのジャンルの専門家に参加してもらっている。たとえば松永伸司氏(美学)の論考は画像的キャラクターの問題を理論的に扱っている。また、古典的論文の翻訳も本誌に掲載することで、このジャンルの日本への普及と定着に貢献したいと考えている。ワイツ「美学における理論の役割」(松永伸司訳)が前号に、ウィムザット&ピアズリー「意図の誤謬」(河合大介訳)が最新号に掲載された。

また、さらに哲学それ自体に対するインパクトの大きいところで言えば、メタ哲学的な考察が盛んになりつつある昨今、理論的な文章以外による哲学的活動の可能性が真剣に考察されるようになってきている。「理論的な文章以外」にはいろいろ含まれるが、たとえば小説、映画、絵画、音楽などはこれにあたる。この場合、これらの作品「について」哲学的な分析をしたいだけでなく、それら「によって」哲学ができるかどうか検討されることになる。このテーマについて言うと、本誌では、大谷弘氏(哲学)がヌスバウムらの議論を引きながら、Jポップアーティスト、横原敬之による倫理学の可能性を扱っているし、岡本慎平氏(倫理学)が、ロボット倫理学をもとに、スーパーファミコンのゲームにおける倫理的テーマを論じている。また高田敦史氏(美学)が、『ウルトラQ』が哲学する、という例を通じて、フィクションによる哲学の積極的可能性を考察している。また、この論文は同時に、そのような可能性のきわめて理論的な考察でもある。さらに、作品による哲学を論じているわけではないが、哲学の専門的な議論を扱うものとしては、哲学的概念の文化的側面を強調して、デイヴィッドソン哲学を批判的に検討する、古田徹也氏(哲学・倫理学)の論考もある。

以上はすべて本誌では「文化の分析哲学」と呼んでいるものだが、これとは別に、「文化としての分析哲学」というテーマも本誌にはある。これは文化を哲学的に分析するというよりは、分析哲学もまた文化のひとつとしての側面をもつ、ということを炙り出すための試みである。

このようなテーマを扱えるようになったのは、分析哲学も百年以上の歴史を経ることで、その歴史的な成立・変遷の経緯が十分に研究される

ようになってきたからである。とりわけ、フレーゲ、ラッセルからウィトゲンシュタイン、論理実証主義、またそこからクワインなどのアメリカの第一世代にいたるまでの歴史が丹念に研究されるようになってきた。その結果、ラッセルとイギリス哲学との密接な関係や、フレーゲ、ウィトゲンシュタイン、論理実証主義とドイツ哲学との密接な関係、そしてそれらとアメリカの哲学者たちの考え方との乖離などが、次第に明るみになってきた。たとえば私自身が研究しているところで言うと、カルナップと新カント派との関係が強調されるようになってきたし、またさらには、カルナップと当時の自然科学における「客観性」の理念との関係や、カルナップと当時のデザイン・建築運動(バウハウス)との関係なども論じられるようになってきている。

この「文化としての分析哲学」に関しては、本誌では創刊号から「分析哲学とモダニズム」という特集を組んで、分析哲学のモダニズムとしての特徴を考察している。私、長田怜(哲学)が全体を素描する論考に始まり、河合大介氏(美学)が美術におけるモダニズムの理論を、松本大輝氏(美学)がグッドマン理論によるモダニズム絵画の分析を、要真理子氏(美学)が文学・美学におけるモダニズムとラッセル哲学との関係を論じる論考を、それぞれ寄せている。

以上が分析哲学内部での研究の進展に伴って出てきた、新たな研究動向であり、それらを反映する本誌の論文・論考たちである。他方、分析哲学の外に目を向けると、分析哲学は哲学業界のうちでは存在感を増してきているところがある。ただ、それは業界事情にすぎず、哲学の外側にインパクトをもっているとはいまだ言いがたい。しかし、以上のような研究の進展をもってすれば、そのようなインパクトをもっともってよいのではないかと思われる。

たとえば、文化批評に対する分析哲学の応用などはもっと試みられてよいはずだ。フランス系のいわゆるポストモダン思想が批評の領域と密接に結びついてきたことは対照的に、分析哲学は批評とは疎遠であったし、また、疎遠であることにむしろ意義すら見出してきたふしもあるように思われる。しかし、分析哲学と文化との関係が緊密になってきた現在、批評という、

明瞭さが十分とはいえない領域に、分析哲学の手法が光を与える部分はあるのではないかと期待できる。また逆に、このような応用の試みによって、他の学派と比較したときの分析哲学の方法論としての特質が浮き彫りになってくる可能性も十分にある。今や対象の拡散しつつある分析哲学それ自体に対しても、こうした試みは何かしらの意義をもつのではないかと、いうことである。

あるいは、たとえば、伝統文化から昨今の大衆文化までを含めた日本文化研究のような領域に、分析哲学の手法が用いられてもよいのではないだろうか。これは日本で分析哲学を応用することのひとつの意義となりうる。このように、哲学関連領域にとどまらない範囲にまで分析哲学の手法を拡張したい、ということも、本誌の野心のうちにある。「文化の分析哲学」やレビューの試みは、その一端とも捉えられるだろう。

また、そのような特殊な領域に限らずとも、一般教養層に分析哲学の魅力伝える機会がもっとあってもよいのではないかと考えられる。昔に比べれば分析哲学の読みやすい入門書はずいぶん増えたと思うが、それでもまだ十分とは言えないだろう。そのような事情もあり、本誌では初学者が分析哲学の話題・手法を知るとっかかりを増やそうという試みをしている。先述のコラムやレビューもそのひとつであるが、特に巻頭には、分析哲学のトピックに関する入門記事を毎回設けている。創刊号から、高崎将平氏（哲学）による平易な語り口の自由論入門記事を、3回にわたって掲載している。これは大変好評いただいているシリーズである。

さらに、これは専門的な意味での哲学と必ずしも直結するわけではないが、社会を見るための広い意味での哲学的視座を与える、という試みもしている。学界以外の世界、つまり一般社会を哲学的な視点から観察する、という試みである。この種の記事はいまだ少ないが、哲学の修士課程を出て一般企業に就職したさとひろ氏による報告記事は、企業内での業務評価や思考・判断のさまざまな具体例をロジカルシンキングの視点から冷静に分析している。

以上のように、本誌は、分析美学や倫理学の専門家や、さまざまな領域の文化に日ごろから親しんでいる分析哲学の専門家たちが集い、考察を発表する場所となっている。それは必ずしも各々の狭義の専門領域の成果発表であることを意味しておらず、ふだんの専門から離れた考察の発表も含まれている。たとえば声優について論じている佐藤氏と稲岡氏はそれぞれ、ダメットの専門家、ライブニッツおよび数学・論理学の哲学の専門家である。このようにふだんの専門を離れて、少し肩の力を抜いて考察を発表できるということも、本誌のように柔らかい雑誌の長所であることだろう。ということなので、もし何か発表されたい研究者の方々がいれば、ぜひとも発表の場所としていただきたい次第である。

今後は、美学的なテーマだけでなく、倫理的なテーマも大々的に扱いたいし、自然科学、情報科学や社会科学など、哲学系以外の領域とも積極的につながりを作っていきたいと考えている。科学哲学の研究者の方々にもご協力いただけたらこれ以上の喜びはない。

V

石本基金「国外学会参加費用補助」成果報告

工学院大学教育推進機構特任助教
吉沢文武

学 会 名：2016 International Association for
the Philosophy of Death and Dying
Conference

発 表 題 目：The Comparative/Non-Comparative
Dispute about the Account of Harm

and the Badness of Death

発 表 言 語：英語

発 表 日：2016年5月18日

「死の哲学 (Philosophy of Death)」は、英語圏

の哲学・倫理学において勢いのある領域のひとつである。死はどのような意味で死んだ当人にとって害でありうるのか、死者はどのような存在論的身分をもつのか、ということがその中心的な話題である。本発表では、そうした議論のなかでもとくに、死が害であると言われるさいの「害(harm)」の概念の分析に焦点を当てている。害の概念の分析は、基本的な議論の状況として、比較説(Comparative Account)と非比較説(Non-Comparative Account)という大きく分けて二つの見解の対立図式のもとで、周辺のさまざまな論点を含みながら展開している。それに対して本発表では、両陣営のあいだに実質的な対立は存在しないと示すことを試みている。そのことは、私の考えでは、両見解を分かち最も典型的な例だとみなされている死の悪さの扱いに関してさえ成り立つ。

害に関する比較説によれば、ある出来事がある主体にとって害であるかどうかは、その主体のもつ現実の福利の水準と、ありえた反事実的な福利の水準との比較によって決まる。より正確には、出来事が主体にとって害であるのは、次の反事実条件文が真であるときである。すなわち、その出来事が起こらなければ、その主体はより良いあり方をしていた。対照的に、害に関する非比較説によれば、出来事が害であるかどうかは、現実と反事実的状況とのそのような比較によって決まるのではなく、痛みや身体的損傷を主体にもたらすといった負の内在的特徴がその出来事に伴うかどうかによって決まる。

一見すると、両見解のあいだの対立は明らかであると思われる。それは、それぞれの見解のもとで、害に分類される出来事の外延が異なるからである。比較説によれば、たとえばよく知られているように、死は最も典型的な「剥奪の害(deprivation harm)」である。ある主体の死とはその主体の非存在のことであり、その主体の経験の空白のことである。そのため、主体が被る痛みや損傷といった負の内在的特徴は死自体には伴わない。したがって、死が死んだ当の主体にとってなぜ悪いのかについての有望な説明は、次のようなものになる。つまり、死の悪さとは、死ななければあり得た生に含まれる善を死が奪うことに存するのである、と。非比較説のもとでは、このような説明は可能でない。し

かしながら、むしろ不作為や他のいくつかのケースについては、非比較説は比較説よりも直観的な結果を導く。多くの論者は、比較説と非比較説という対立図式に則って、それぞれの立場の擁護を試みている。

だが本発表では、この前提に疑いを向けている。すなわち、両見解のこうした違いは実質的なものでないかもしれない。害の理論が満たすべき最も重要な条件のひとつは、われわれの合理的な熟慮に沿うこと(おそらく、道徳的考慮にも沿うこと)である。つまり、害の理論は、われわれが自愛の思慮に基づいて避けるべきことを(さらに、他人に対して道徳的にすべきでないことを)正しく選び出すのでなければならない。そして、比較説も非比較説もこの条件を満たすように思われる。比較説のもとで避けるべきだとされるのは、反事実的な比較に基づいて害だと評価されるシナリオである。しかしながら他方の非比較説のもとでも、それぞれのシナリオが主体に与える(避ける、あるいは推進する)理由は、結局のところ比較される。そのうえ最終的には、比較説と非比較説のどちらによっても、避けるべきものとして同じシナリオが選び出される。ポイントは、いずれにせよ選択肢の比較自体は避けられないということである。

この論点は、死の悪さについてさえ成り立つように見える。比較説によれば、死は死ぬ当の主体にとって、比較に基づく害である。しかし、非比較説のもとでも次のように考えることができる。一方で、主体が死ぬシナリオは、その主体に対して、避ける理由も推進する理由も与えない。なぜなら死には、負であれ正であれ、内在的な価値が帰属しないからである。他方で、現実よりも長いあいだ良い生を送るシナリオは、主体に対して、それを推進する一定の強さの理由を与える。そのため、非比較説のもとでさえ、それらの理由の比較に基づけば、他方の選択肢を推進すべきという意味で、死は避けるべきものということになる。

本発表において私は、まず、比較説と非比較説のそれぞれにおいて出来事の評価に用いられる諸要素を特定し、そのあと、死の悪さや他のいくつかのケースについて論じることを通して、両見解のあいだに実質的な対立はないという上

述の基本的な論点を明確化している。おそらくこの主張に対しては、問題を単純化しすぎているという反応が予想されるため、比較説と非比較説がとりうるいくつかの付加的な理論的選択として、次の三つをとりあげ、それぞれについて論じている。すなわち、(1) 主体が非存在であることは当の主体にとってゼロの水準の価値をもつのか、いかなる水準の価値をもたないのか、(2) 人生のなかで得られる内在的価値は、通時的に足し合わせることができるのか、(3) 害は利益に対してより重い価値をもつのか、の三つである。たしかにそれらの付加的な要素について、それぞれどの選択肢を組み合わせるかに応じて、比較説と非比較説の帰結にいくらかの違いは生じる。しかしながらそれらの違いは、実践的な選択の場面において、どのシナリオを選ぶべきかという評価に違いを生じさせない。その意味で、両見解に実質的な対立はないというのが、本発表の結論である。

International Association for the Philosophy of Death and Dying (IAPDD) は、「死と死にゆくこと (death and dying)」をめぐる哲学的問いの探究に関心をもつ研究者からなる国際的な組織であり、最初の大会は2014年11月にカリフォルニア州立工科大学ポモナ校において開催された。大会は隔年の開催で、ニューヨーク州のシラキュース大学における本大会が第二回目である。次回は2018年にスウェーデンのウプサラ大学での開催が予定されている。本大会には、基調講

演者としてフランシス・カム (Frances Kamm) 氏とシェリー・ケイガン (Shelly Kagan) 氏が参加し、他に一例を挙げれば、デイヴィッド・ベネター (David Benatar) 氏やベン・ブラッドリー (Ben Bradley) 氏、イェンス・ヨハンソン (Jens Johansson) 氏、フレデリック・カウフマン (Frederick Kaufman) 氏らといった、死の哲学の領域に限定されない著名な研究者、勢いのある研究者らが発表者やコメンテーターとして参加していた。そうした研究者たちと、質疑や休憩、夕食などで直接に交流のできる非常に有意義な(そして豪華な)学会であった。付け加えると、レセプションやコーヒープレイクに当然のようにベジタリアン食の選択肢があったのも改めて印象的であり、また安心できた。

発表に先だって、コメンテーターから発表原稿に対するコメントを受け取っており、当日の発表はそれに対する再応答と質疑を含むものだった。コメンテーターのニール・ファイト (Neil Feit) 氏は、害の分析をめぐる議論を早い時期から牽引してきた一人であり、発表前から、帰国後、現在も続くeメールなどによるやりとりは、私の研究にとって極めて有益なものになっている。こうした密度の高い学術的交流は、この国際会議に参加してこそ得られたものである。日本科学哲学会の石本基金の助成により、このような得がたい機会をいただいたことに対して、石本新先生とご遺族、運営委員の方々に深く感謝を申し上げたい。

大阪大学 D2
藤田 翔

学 会 名 : The 3rd Conference on Contemporary
Philosophy in East Asia(CCPEA 2016)
発 表 題 目 : The Beginning of Spacetime and
Vacuum
発 表 言 語 : 英語
共同発表者 : 無し
発 表 日 : 2016年8月20日

宇宙が誕生してから現在に至るまでの過程をビッグバン宇宙論は語っている。その標準的な物理理論において、時空はどのように出来て今

の宇宙に実在するのかという問いかけが今回の発表の主題である。そもそも時空は宇宙の始まりにおいて物質と共に誕生したのか、それとも背景として既に存在していたのかという素朴な疑問 (Brenner 2015, Krauss 2012) に少しでも近付けたらと願い、今まで別々で論じられていた、マクロな一般相対性理論とミクロな量子重力理論をそれぞれ土台とした時空の扱いを総合的に論じて、あくまで宇宙の1つの歴史の中で時空の実在性を哲学的にカテゴライズした。

出発点はやはり一般相対性理論における従来

の時空の哲学で、それをマクロな膨張宇宙論に
 応用することから始めた。時空の実在性に関し
 ては元々多くの議論がある。代表的な立場の中
 に、時空はモノとは独立に存在するという実
 体説 (substantivalism) とモノやモノの性質に還
 元されるという関係説 (relationism) がある。そ
 してそれぞれの立場の中でも様々なあり方があ
 る。例えば同じ実体説であっても、時空を多
 様体 (manifold) だと考える立場があれば、計量
 (metric) だと考える立場もあり、一般相対性理論
 の範疇においてはどちらが実体説の基盤である
 かということに関して共通の一致など無かった
 (Dorato 2000)。これは実体説と関係説の原点で
 あるニュートン力学時代の背景が大きく影響し
 ており、そもそも当時の力学であるニュートン
 力学と現在の一般相対性理論とは時空に関する
 扱いも大きく異なっていることに依拠してい
 る。例えばニュートン力学では時空は物体、す
 なわちモノの位置やその動きを論じるための容
 れ物のような存在であるが、この考えを一般相
 対性理論に適用させると穴の議論のような厄介
 な問題に突き当たる。一般相対性理論では時空
 はモノの受動的な意味での背景ではなく、モノ
 と相互作用し計量や曲率で与えられる時空構造
 を纏っている一種のエネルギー媒体でもある。
 そのために、時空は容れ物という概念をそのま
 ま持ち込めば、自然界からそういったモノや場
 を全て取り除いた多様体こそが時空を表してい
 るという結論に陥ってしまう。しかし多様体は
 数学上のモデルであり、物理的な時空を論じる
 ためには些か不都合である。点の集合体を表す
 多様体には過去や未来や現在、そして因果領域
 すら示せない以上、時空を指示しているとはい
 い難い。しかも多様体そのものが時空であるな
 らば、微分同相写像 (diffeomorphism) によつて
 同じ多様体上に座標変換した時に、変換の前後
 で別々の時空点を指示していることになるため
 に、一般相対性理論が決定論的であるという根
 幹的な性質をも崩してしまっている (Earman and
 Norton 1987)。結局時空を容れ物と見なすこと
 は一般相対性理論では不適當で、アインシュタ
 イン方程式によって決められる局所的な計量こ
 そが時空の本質であり、時空構造が時空そのも
 のであるという立場が実体説に登場する (Hofer
 1996)。これが計量実体説であるが、時空構造

が直接観測できる対象ではない以上、時空とい
 う独立した存在の性質なのか、あるいはモノの
 性質に還元されるべきものなのか、すなわち時
 空は実体説なのか、あるいは関係説なのかは曖
 昧なままである。こういった現状の中で構造実
 在論を時空に応用した時空構造実在論が登場す
 る (Dorato 2000 2008)。構造実在論は、存在を対
 象とその構造に分けて後者の実在を主張する立
 場であり、時空の場合は時空点という各々の対
 象以上にその関係を示した時空構造こそが実在
 の本質であると主張している。この考えは計量
 を時空の本質と見なす一般相対性理論の性格に
 合致しており、またはその根幹となる一般共変
 性の数学的基盤とも非常に相性が良い。という
 のも一般相対論の時空は、時空点に何らかの内
 在的な性質も個体原理 (primitive identity) も認め
 ず、ただ周りの構造のみからそのアイデンティ
 ティーを得ている。つまり座標値そのものの値
 には大して意味が無く、計量を伴って初めて
 物理的な時空点を形成できるという点でまさ
 く時空を構造実在論の立場で捉えるのが妥当な
 のである。

こういった理由でマクロな一般相対性理論に
 においては時空構造実在論を採用し、現在の宇宙
 の加速膨張に応用した。宇宙は加速膨張してい
 るというのは現象的な実験事実ではあるが、物
 理学者はその現象の説明を「空間が膨張してい
 る」ためだとしている。つまり空間が膨張する
 故に空間に張り付いている銀河や銀河団は益々
 お互いの距離を大きくしていくという説明で
 ある。現に相対論的宇宙論においては大局的な
 宇宙を表す時空計量であるロバートソンウォー
 ーカー計量

$$ds^2 = c^2 dt^2 - a^2(t) \left[\frac{dr^2}{1 - Kr^2} + r^2 (d\theta^2 + \sin^2 \theta d\phi^2) \right]$$

に現れるスケール因子 $a(t)$ が宇宙時間 t の増加
 に伴って大きく変化することで、この「空間の
 膨張」を説明している。これは共動座標系の目
 盛りの増加を意味している。つまりは宇宙の膨
 張をあたかも風船に張り付いたいくつかのマー
 クが、風船に空気を入れていくと共に大きく距
 離を隔てていく現象に喩えているのである。構
 造実在論的観点に従えば、共動座標系は宇宙を
 論じる上で最も適していたから選んだだけで、
 時空構造自体は他のパラメータを指定すること

も可能であり、例えば時間パラメータと共に大きさの変化しない静止座標系

$$ds^2 = (c^2 - H^2(t)r^2)dt^2 + 2H(t)tdr - \frac{dr'^2}{1 - \frac{Kr'^2}{a^2(t)}} - r'^2(d\theta^2 + \sin^2\theta d\phi^2)$$

で考えることも原理的には可能である（世の中の物理学者の誰もがこんなややこしい座標系は用いないが）。だから「空間が膨張する」という表現は、あくまでこの共動座標系に限った場合の現象であり、「空間が膨張している」という表現は時空構造実在論の立場では一般に相応しくはない。これがマクロな相対論的宇宙論における帰結であり (Fujita 2017)、時空構造で考える以上は時空のあり方は多種多様である。ただし、ごく自然な解釈という意味合いではこの膨張する空間も最善の説明への推論という意味では無視できない実体であり、共動座標系を空間と考えた場合も以下のマイクロ宇宙論では検討する。

続いて、量子重力理論によって記述される宇宙論を考える。上記で論じた共動座標系で表された時間パラメータを遡ると、宇宙はその規模がどんどん小さくなり、宇宙初期においては一般相対性理論が破綻して量子効果の影響を考慮しなければいけない規模に到達する。ここで量子重力理論が新たに必要となるが、今回用いる物理理論としてはループ量子重力理論とした。ループ量子重力理論とは、一般相対性理論を直接量子化しており、あくまで一般相対性理論を出発点としていることが大きな特徴であるが、古典的な時空との対応が明確ではないためにまだ定式化には至ってはいない物理理論である (ex.Thiemann 1998 2007)。今回はこのループ量子重力理論を用いて時空の哲学を考えた。ループ量子重力理論では空間にスピネットワークと呼ばれる最小単位が存在し、グラフ理論によってその離散的な体積要素が増加、あるいはスピネットワークの数自体が増加することで空間の膨張を説明しようとしている。時空構造実在論を応用すると、構造とスピネットワークの対応は不明だが、少なくともスピネットワークの大きさがゼロになったり、数が無くなったとしても構造（計量）が存在する限り空間はあり続けるだろう。すなわち宇宙の始まりの真空は時空構造の1種であると言える。一方で、共

動座標系を空間の実体と考えた場合、スピネットワークは空間そのものであり、それが無くなった時点で空間そのものは消える。すなわち宇宙の始まりは空間すら存在し得ない真なる無状態となる。以上がマイクロな宇宙論における時空の哲学的観点の宇宙誕生である。

このように2つの立場で考えた場合に、宇宙の始まりにおける異なる真空の描像が得られたことが本発表の成果である。物理学の哲学としての今回の結論が場合によっては、時空の概念をヒントにした量子重力理論の発展に何らかの指針を与えることを僅かながら期待させられたことが一番の利益である。

時空の哲学という狭き分野を研究する上で、従来の研究に上積みして新しい主張を交えることは、今後の指針が少ないという意味では難しいが、少数派ゆえの自由度という意味においては非常に発展性のある学問でもあると私は捉えている。今回の発表は、高い専門性の問われる物理学を題材にしていることもあり、科学を論じる上でも詰めが甘かった部分もあり、そういった箇所は今回の発表を元にした大会用の論文（投稿済み）を執筆する上でも大いに反省して改めたつもりである。

今回の発表は自身の初めての海外での研究発表であり、規模としても今まで参加した学会と比較すれば最大の規模であった。アジアの学会ということで、韓国という隣国で開催されただけに日本との時差の影響もなく、基本的に移動も首尾よく短時間で済ませられ、快適な環境で初めての発表を終えることができた。構造実在論に関しては哲学的に大いに盛り上がるトピックであったために、物理学的な見解に基づくフィードバックは難しかったが、哲学的な議論という意味では非常に有意義な機会であった。惜しむらくは自身の英語力の乏しさのせいで、数多くの質問に対して満足のいく答えを返せなかった点であるが、これは今後の研究内容の発展と共に次回以降の改善点としたい。

最後に、発表者の CCPEA 2016 への参加は、石本基金による国外学会参加費用補助によって実現された。石本基金、日本科学哲学会にお礼を申し上げる。

VI 編集後記

前編集長の松本俊吉さんを引き継いで編集長となりました、國學院大學の金杉武司と申します。よろしくお願いいいたします。

今回はその初仕事として、村瀬さん、島村さん、長田さんにご寄稿を依頼しました。今回、お三方にお願いしたのは、何よりもまず私がお三方のお話を伺いたいという個人的な願望からでした。しかし、頂いた文章には、学会員の多くの皆さんにとって価値ある情報がたくさん含まれているように思います。まず村瀬さんには、大学以前の哲学教育について、その現場に携わるお立場からの文章を寄せて頂きました。「大学以前」と題してはいるものの、その内容は、大学で哲学教育に携わる立場の人たちにとっても非常に啓発的なものだと思います。私などは自分の視野の狭さや努力不足を指摘されたようで、大きな刺激を受けました。島村さんには、ピッツバーグ大学での留学体験についてご寄稿頂きました。ブランダムや大学院生たちとの交流についてのその文章は、落ち着いた表現で綴られています、その場の状況を自ずと想像させるような生き生きとしたものであり、留学を考えている人たちにとって非常に参考になるものだと思います。長田さんには、創刊1周年を迎えた『フィルカル』という雑誌について、編集長のお立場から紹介して頂きました。文化と分析哲学をつなぐこの雑誌の試みは、さまざまな文化現象に関心がある人たちにとっても、またメタ哲学的な問題に関心を持つ人たちにとっても、非常に興味深いものではないかと思えます。ご寄稿下さいましたお三方に心より御礼申し上げます。

また今回は、「国外学会参加費用補助」の制度を利用して国際学会に参加された吉沢さんと藤田さんからも、学会規定に基づいて、それぞれの発表についてご報告を頂きました。有難うございました。

現状では、寄稿の依頼が編集長の実質的な仕事となっているようですが、本ニューズレターは、学会員の間での自由な情報交換の場であり、学会事務局が随時、投稿を受け付けています。皆さん奮ってご寄稿下さい！

(金杉武司)